教科書文庫
4
110
31-1927
2500027860

# 尋常小學修身書 卷四

兒童用

文部省

40440
教科書文庫
4
110
31-1927
25000
27860

教科書文庫
4
110
31-1927
2500027860

廣島大學
東雲分校
圖書之印

# 尋常小學修身書 卷四

兒童用

文部省

登録番号
27860
分類 375.93 M

広島大学図書
2500027860

# 教育ニ關スル勅語

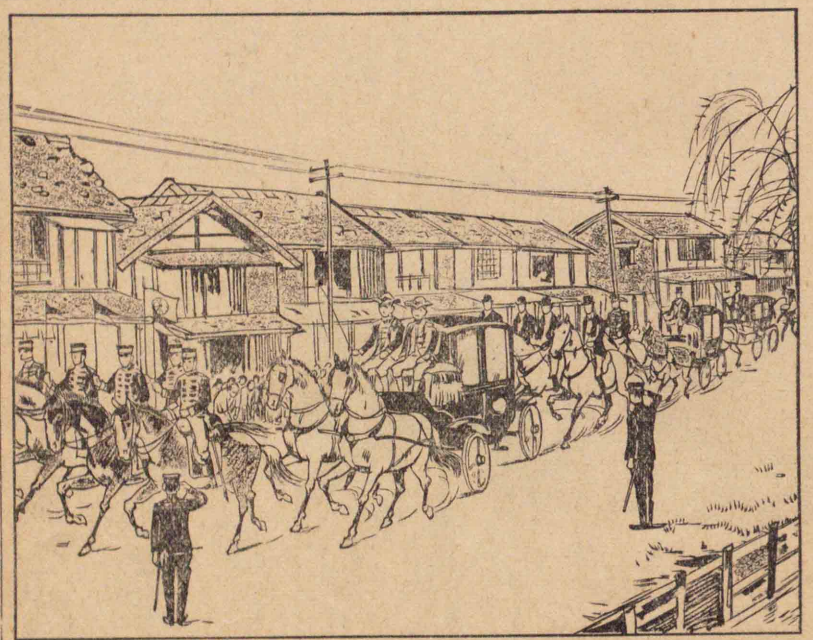
## 目録


第一　明治天皇……一
第二　能久親王……五
第三　靖國神社……八
第四　志を立てよ……十
第五　皇室を尊べ……十一
第六　孝行……十四
第七　兄弟……十七
第八　勉強……十九
第九　規律……二十一
第十　克己……二十三
第十一　忠實……二十六
第十二　身體……二十八
第十三　自立自營……三十
第十四　自立自營（つゞき）……三十三
第十五　志を堅くせよ……三十五
第十六　仕事にはげめ……三十七
第十七　迷信におちいるな……四十一
第十八　禮儀……四十三
第十九　よい習慣を造れ……四十六
第二十　生き物をあはれめ……四十八
第二十一　博愛……五十一
第二十二　國旗……五十三
第二十三　祝日大祭日……五十五
第二十四　法令を重んぜよ……五十八
第二十五　公益……六十
第二十六　人の名譽を重んぜよ……六十四
第二十七　よい日本人……六十六

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽



# 第一　明治天皇

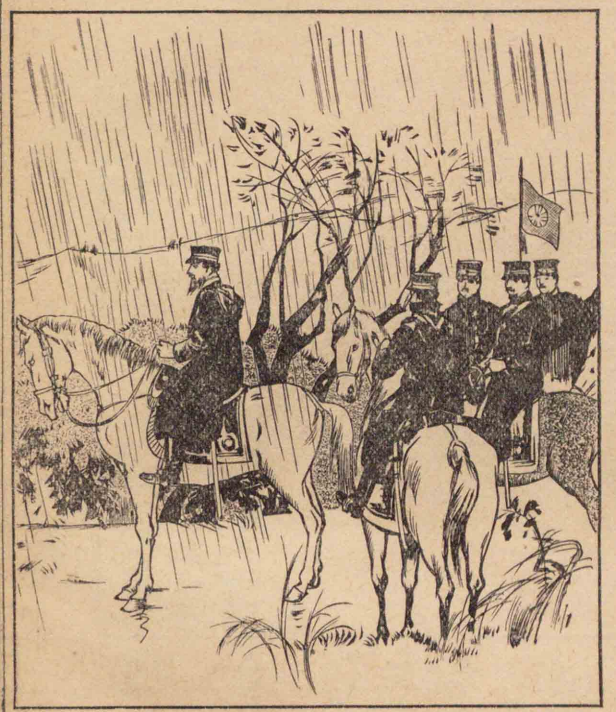
明治天皇は常に人民を子のやうにおいつくしみになり、之と苦樂をともにあそばされました。

明治十一年天皇は北國御巡幸の時、新潟縣で目のわるいものが

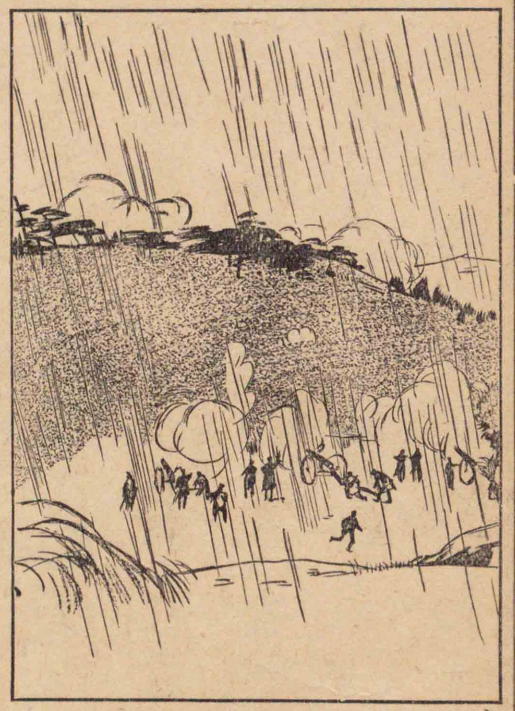


尋修四

多いのをごらんあそばされて、それをなほすために御てもと金を下されました。又天皇はぢしん・こうずゐ・くわじなどのさいなんにかかつた人民を度々おすくひになりました。



明治二十三年愛知縣で大えんしふのあつた時、天皇ははげしい雨のふるなかで、へいしと同じやうに御づきんをもめされず、御統監になりました。



明治二十七八年のいくさの時、天皇は大本營を廣島へ御進めになりましたが、大本營はしつそなせいやうづくりで、その一間が御座所でございました。天皇はこの御間にばかりし

じゆうおいでになつて、朝早くから夜おそくまで、色々おさしづあそばされました。

天皇は常に御しつそにあらせられました。表御座所でお用ひのすゞりばこや、ふで・すみなどもみな普通のもので、これをやくにたゝなくなるまで、おつかひになりました。又この御間のしきものは、古くなつて色がかはつておかまひなく、御いすの下のけがはも、やぶれたところをたびく つくろはせて、なかく




おとりかへになりませんでした。

## 第二　能久親王

能久親王（北白川宮）は明治二十八年五月臺灣のぞく軍を御せいばつなさるために、かの地へおわたりになりました。おつきになつてもお休みになるやうな家がないので、砂の上にまくをはり、そまつないすをおいて御座所としました。又御しよくじには、さつまいものむしやきをさし上げました。それからだんく 軍を

お進めになりましたが、へいしとともに大そう御なんぎをなされ、御病氣(ごびやうき)におなりになつても、少しもおいとひなされず、おさしづなさいました。

ぞくはたいてい平らぎましたが、南の方にまだ





のこりのぞくがゐましたので、その方へお進みになりました。そのとちゆう又御病氣におかゝりなさいました。ぐんいは「おとゞまりになつて御やうじやうあそばしますやうに。」と申し上げましたが、親王は「わが身のために國のことをおろそかにすることは出來ぬ。いきのあるかぎりはつゞける。」とおほせられ、きゆうくつなかごにのつてお進みになりました。

親王はかやうに國のためにおつくしになり

ましたが、かなしいことには、御病氣が重くなつて、まもなくおかくれになりました。

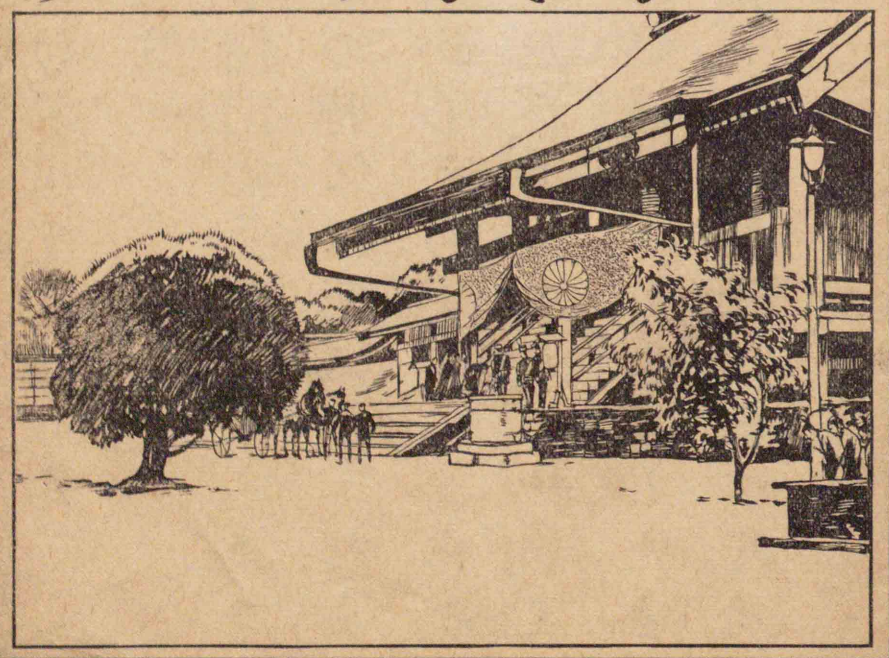
## 第三　靖國神社

靖國神社は東京の九段坂の上にあります。この社には君のため國のために死んだ人々をまつつてあります。春四月三十日と秋十月二十三日の祭日には、勅使をつかはされ、臨時大祭には天皇・皇后兩陛下の行幸啓になることもございます。君のため國のためにつくした人々をかやう





に社にまつり、又ていねいなお祭をするのは天皇陛下のおぼしめしによるのでございます。わたくしどもは陛下の御めぐみの深いことを思ひ、こゝにまつつてある人々にならつて、君のため



國のためにつくさなければなりません。

## 第四　志を立てよ

豐臣秀吉は木下彌右衛門の子で、尾張のまづしい農家に生れ、八歳の時父に死にわかれました。秀吉は小さい時からえらい人にならうと志を立ててゐましたが、よい主人に仕へようと思つて、十六歳の時遠江へ行きました。ちゆうで松下加兵衛といふ武士にあつて、その人に仕へることになりました。秀吉はよく




尋修四

はたらきましたので、主人の心にかなひ、だんだん引立てられました。けれども仲間のものにそねまれたので、ひまをもらつて尾張へかへりました。

その後秀吉は織田信長がすぐれた大將であるといふことを聞いて、つてをもとめて信長のざうりとりになりました。これから秀吉はだん〳〵出世をしました。

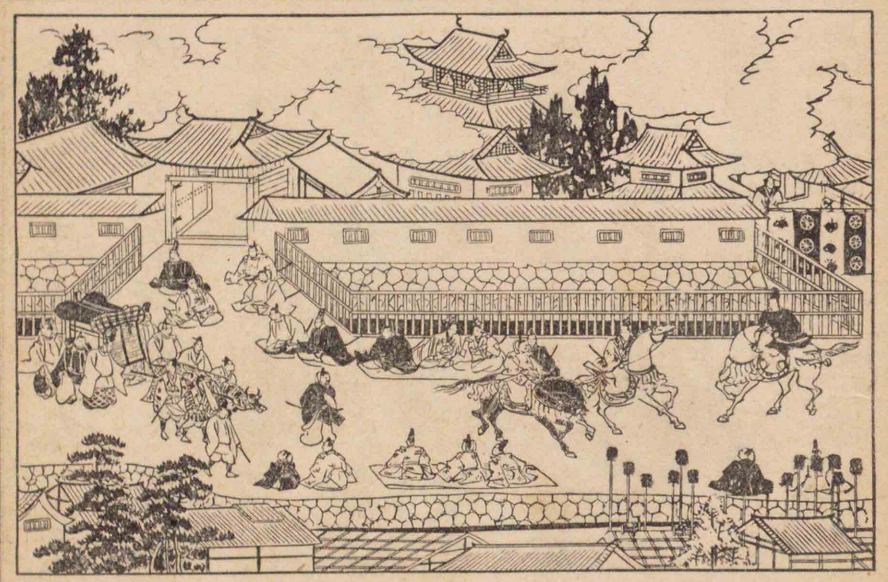
## 第五　皇室を尊べ

秀吉は信長のなくなつた後、その志をついで國内を平げ、おひ〳〵とくらゐがのぼつて、しまひには關白太政大臣となり豐臣の姓をちやうだいしました。

そのころの天皇は正親町天皇と申し上げましたが、よの中がみだれてゐたために、おそれ多くも皇居の御ふしんも十分出來ず、御不自由がちであらせられました。秀吉は力をつくして皇室の御ためをはかりましたので、天皇







は御よろこびになりました。

その後秀吉は京都にやしきをかまへて聚樂と名をつけましたが、ある年そのやしきに後陽成天皇の行幸を御願ひ申し上げました。その時秀吉は文武の役人を從へ

て、御ともをいたしました。御道すぢには多くの人々が拜觀してゐて、久しぶりにこの太平のありさまを見てよろこびました。又聚樂では秀吉が大名たちに皇室を尊ぶことを天皇の御前でちかはせました。

京都の豐國神社は秀吉をまつつてある社でございます。

## 第六　孝行

渡邊登は十四歳のころ、家がまづしい上に父

が病氣になつたので、どうかしてうちのくらしをたすけて、父母の心をやすめたいと、かんがへました。登ははじめ、がくしやにならうと思つて、がくもんをべんきやうしてゐましたが、ある時、人

から「ゑをかくことをけいこしたら、くらしのたすけになるだらう。」とすゝめられ、すぐある先生について、ゑをならひました。

父は二十年ばかりも病氣をしてゐましたが、登はその長いあひだ、かんびやうをして、すこしもおこたりませんでした。父がなくなつた時、大そうかなしんで、なきながら、ふでをとつて、父のかほかたちをうつしました。さうしきがすんだのちも、朝ばんきものをあらため、つ



つしんで父のゑすがたにれいはいをしました。

孝ハオヤヲヤスンズルヨリ大イナルハナシ。

## 第七　兄弟（きやうだい）

登の弟やいもうとは、みな早くからよそへやられました。

八つばかりになる弟が、ほかへつれて行かれる時、登は弟のふしあはせをかなしんで、雪が

ふつてさむいのに、とほいところまでおくつて行つてわかれました。

その弟がしらない人に手をひかれ、うしろをふりむきながらわかれて行つたすがたが、あまりにかはいさ

うであつたので、登はいつまでもその時のことをおもひ出してなげきました。

## 第八　勉強（べんきやう）

登はさきに人のすゝめにより、ある先生についていて、ゑをならつてゐましたが、おれいが十分に出來なかつたため、二年ばかりでことわられました。登は力をおとしてないてゐたら、父が「これくらゐなことで力をおとしてはならぬ。ほかの先生についていて勉強せよ。」といひまし

た。登は父のことばに
はげまされ
て、ほかの先生
についてならひ
ました。その先生は
よくをしへてくれ
られましたから、登
のわざはだん〳〵す
すみました。そこで登

はゑをかいてそれをうり、うちのくらしをた
すけながら、なほ〳〵ゑのけいこをはげみま
した。又その間にがくもんもしましたが、ひま
が少いので、まい朝、はやくおきてごはんをた
き、その火のあかりで本をよみました。

カンナンナンヂヲタマニス。

## 第九　規律（きりつ）

登は父がなくなつてから、そのあとをついで、
だん〳〵重い役に取立てられました。そのこ

ろから日々のしごとをさだめて、朝ひるばんともそれぐ〳〵じこくにわりあて、それをかでうがきにして、そのとほりおこなひました。

こんなに登は規律ただしくしたので、ゑが大そうじやうずになつたばかりでなく、がくもんもすゝんでえらい人になり、せけんの人々からうやまはれるやうになりました。

## 第十　克己

高崎正風は薩摩の武士の家に生れました。九歳の頃、或朝、食事の時に、「御菜がまづい。」といつてたべませんでした。召使は何か他に御菜をこしらへようとしますと、隣の間に居た母が來て、「お前は武士の子でありながら、食物につ

非合理的

いてわがまゝをいひますか。昔いくさの時には殿様さへ召上りものがなかつたこともあるといふではありませんか。どんな苦しいことでもがまんをしなければ、よい武士

にはなれません。この御菜がまづければたべないがよろしい。」といつて正風の膳を持去りました。正風は一度母の言をひどいと思ひましたが、遂に自分のわがまゝであつたことに氣がついて、何べんも母にわび、姉もまたわびてくれましたのでゆるされました。その時、これからは食事について決してわがまゝをいふまいと誓ひました。それから正風はこの誓を守るばかりでなく、どんなんぎなことで

も、よくがまんしたので、後には、りつぱな人になりました。

## 第十一　忠實

おつなは若狹のれうしのむすめで、十五歳の時、子もりぼうこうに出ました。或日主人の子供をおぶつて遊んでゐると、一匹の犬が來て、おつなにとびかゝりました。おつなはおどろいて、にげようとしたが、にげるひまがない。きふにおぶつてゐた子供をぢめんにおろし、自



分がその上にうつぶしになつて、子供をかばひました。犬ははげしくおつなにかみついて、多くのきずをおはせましたが、おつなは少しも動きませんでした。

そのうちに人々がかけつけて、犬を打ちころし、おつなをかいはうして、主人の家にかへらせました。子供にはけががなかつたが、おつなのきずは大そう重くて、そのために、とうゝ死にました。これを聞いた人々はいづれも深

くかんしんして、おつなのためにせきひを立てました。

## 第十二　身體

伴信友はつねにけんかうに心がけました。毎日朝起きた時と、夜ねる時に姿勢を正しくしてすわり、三四十ぺんもしんこきふをし、又毎朝つめたい水で頭をひやしました。そのほか朝ばん弓を引いたり、はをつぶした刀をふつたりして、よくうんどうしました。かやうに身

體を大切にしたので、年をとつても丈夫で、たくさんの本をあらはすことが出來ました。

すべて身體を丈夫にするには、姿勢に氣をつけ、うんどうをおこたらず、着物

はせいけつにして、あつ着や、うす着にすぎないやうにし、ねむりと食事はきそく正しくしなければなりません。又からだをきたなくしておくと病氣がおこりやすく、うすぐらいところで物を見ると目をいためます。

## 第十三　自立自營

近江に高田善右衛門といふ商人がありました。十七歳の時、自分ではたらいて家をおこさうと思ひ立ちました。父からわづかの金をも





らひ、それをもとでにして、とうしんとかさを買入れ、遠いところまで商賣にでかけました。

道にはけはしい山さかが多

かつたので、善右衛門はかさばつた荷物をかついで登るのに、大そうなんぎをしましたが、片荷づつはこびあげて、やう〳〵山をこえたこともありました。又時々はさびしい野原をも通つて、村々をまはつてあるき、雨が降つても、風が吹いても、休まずにはたらいたので、わづかのもとでで、多くの利益をえました。その後呉服類を仕入れて方々に賣りにあるきました。いつも正直で、けんやくで、商賣に勉強し





尋修四

ましたから、だん〳〵とりつぱな商人になりました。

## 第十四　自立自營（つゞき）

善右衛門は人にたよらず、一すぢのてんびんぼうをかたにして商賣にはげみました。

ある時善右衛門は商賣の荷物を持たないで、いつもの宿屋にとまりました。知合の女中が出て來て「今日はおつれはございませんか。」といひました。善右衛門はふしぎに思つて「しゞ

ゆう一人で來るのに、おつれとは誰のことですか。」とたづねましたら、女中が「それはてんびんぼうのことでございます。」といひました。善右衛門はつねに自分の子供にをしへて「自分ははじめから人にたよらず、自分の力で家をおこさうと心がけて、せいだしてはたらき、又其の間けんやくを守り、正直にしてむりな利益をむさぼらなかつたので、今のやうな身の上となつたのである。」といつてきかせました。







## 第十五　志を堅くせよ

イギリスのジェンナーはふとした事から、牛痘をうゑて疱瘡を豫防することを思ひつきました。友だちにそのはなしをすると、友だちはみなあざけり笑つて「つきあひをやめる。」とまでいひました。それでも少しもかまはず、二十年あまりの間さまざまにくふうをこらし、とうとう種痘の法をはつめいしました。まづ自

分の子に牛痘をうゑてみた上、書物に書いてせけんの人に知らせました。ジェンナーはその後もいろ〳〵とわるロをいはれましたが、ます〳〵志を堅くしてけんきゆうをつゞけてゐました。そのうちに種痘が人だすけの

よい法であると知れて、ひろくせけんにおこなはれるやうになりました。今では我等もそのおかげをかうむつて居るのでございます。

## 第十六　仕事にはげめ

圓山應擧（まるやまおうきよ）は毎日京都の祇園（ぎをん）社へ行つて、多くの雞の遊ぶ有様をぢつと見てゐたので、人々がばかものではないかと思ひました。こんなにして一年もたつて、ついたてに雞の繪をかいたら、生きてゐるやうにできました。そのつ

いたては祇園社にをさめました。これを見る人々はみんなりつぱだとほめるだけでしたが、或日野菜(やさい)賣の老人がしばらく見てゐた後、「雞のそばに草のかいてないのが大そうよい。」とひとりごとをいひました。應擧は老人の家へたづねて行つてそのわけをたづねると、老人は「あの雞の羽の色は冬のものです。それでそばに草のかいてないことが大そうよいと思つたのです。」と答へました。

或時應擧は又ねてゐる猪(ゐのしし)をかゝうとしました。八瀬(やせ)の柴賣女が自分の家のうしろの竹やぶに一匹の猪がねてゐると知らせたので、すぐ一しよに行つて、その有樣をかき

ました。鞍馬から來た炭賣の老人が、その繪を見て、「この猪はせなかの毛が立つてゐないから、病氣にかゝつてゐるのでせう。」といひました。そのあとで八瀬の女が來て「あの猪はあそこで死んでゐました。」とつげました。そこで應擧はあらためてたつしやな猪のねてゐるところを見てかきましたら、せけんの人がほめそやして、一時に應擧のひやうばんがあがりました。



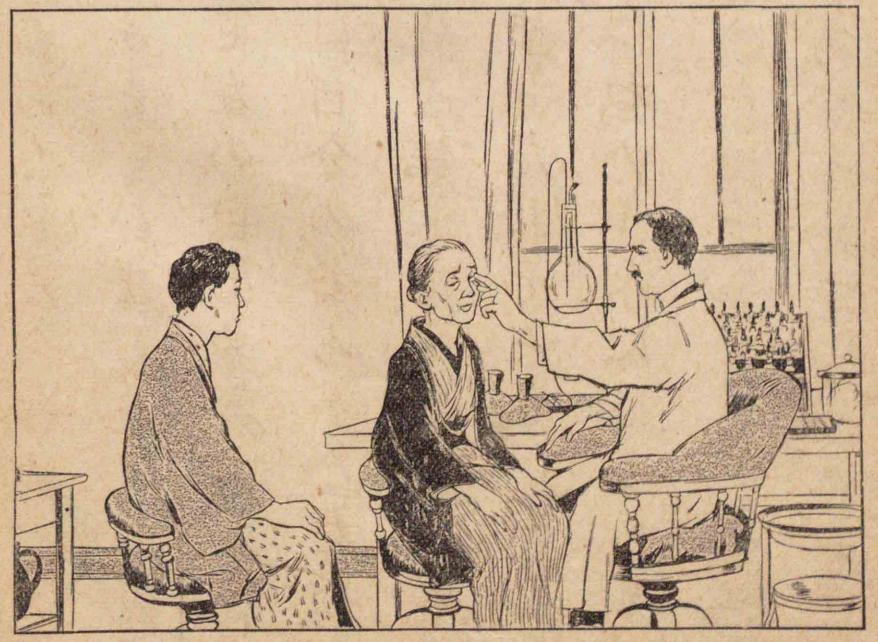


## 第十七　迷信（めいしん）におちいるな

或町に目をわづらつてゐる女がありました。迷信の深い人で、かねてあるところのお水が目の病によいといふことを聞いてゐたので、それをもらつて來て用ひました。けれども病は日々重くなるばかりで、何のしるしも見えませんでした。

或日親類の人がみまひに來て、おどろいて、むりにおいしやのところへつれて行つて、見て

もらはせました。おいしやはしんさつをして、「これははげしいトラホームです。右の目は手おくれになつてゐるので、なほすことは出來ません。左の目はまだ見こみがありますから、手術をして







見ませう。これも今少しおくれたら、手のつけやうもなかつたでせう。」といひました。その後手術をうけたおかげで、左の目はやうくなほりましたが、その女は「自分のおろかなため、だうりに合はないことを信じて、まつたくのめくらにならうとしました。おそろしいのは迷信でございます。」とつねぐ人にはなしました。

## 第十八　禮儀

人は禮儀を守らなければなりません。禮儀を守らなければ、世に立ち人に交ることが出來ません。

人に對(たい)しては、ことばづかひをていねいにしなければなりません。人の前であくびをしたり、人と耳こすりしたり、目くばせしたりするやうな不行儀をしてはなりません。人におくる手紙には、ていねいなことばをつかひ、人から手紙を受けて返事のいる時は、すぐに返事



をしなければなりません。又人にあてた手紙を、ゆるしを受けずに開いて見たり、人が手紙を書いて居るのを、のぞいたりしてはなりません。その外、人の話を立ちぎきするのも、人の家をすきみするのもよくないことです。

人としたしくなると何事もぞんざいになりやすいが、したしい中でも禮儀を守らなければ、長く仲よくつきあふことは出來ません。

シタシキナカニモ禮儀アリ。

## 第十九　よい習慣を造れ

よい習慣を造るにはつねに自分をふりかへつて見て、善い行をつとめ、わるい行をさけなければなりません。瀧鶴臺の妻が或日たもとから赤い毬を落しました。鶴臺があやしんでたづねますと、妻は顔をあかくして「私はあやまちをして後悔することが多うございます。それであやまちを少くしようと思ひ、赤い毬と白い毬を造つてたもとへ入れておき、わる





い心が起るときには、赤い毬に絲を巻きそへ、善い心が起るときには、白い毬に絲を巻きそへてゐます。初のうちは赤い方ばかり大きくなりましたが、今では兩方がやつと同じ程の大きさにな

りました。けれども白い毬が赤い毬より大きくならないのをはづかしく思ひます」といつて、別に白い毬を出して鶴臺に見せました。自分をふりかへつて見て、善い行をつとめることは初は苦しくても、習慣となればさほどに感じないやうになるものです。

習性（セイ）トナル。

## 第二十　生き物をあはれめ

ナイチンゲールはイギリスの大地主（ぢぬし）のむす



めで小さい時からなさけ深い人でございました。父が使つてゐた羊かひに一人の老人があつて、犬を一匹かつてゐました。或時その犬が足をいためて苦しんでゐました。その時ナイチンゲールは、年とつた僧と一しよに通りあはせて、それを見つけ、大そうかはいさうに思ひました。そこで僧にたづねた上、湯できず口を洗ひ、ほうたいをしてやりました。あくる日もまた行つて、手あてをしてやりました。

それから二三日たつて、ナイチンゲールは羊かひのところへ行きました。犬はきずがなほつたと見えて、羊の番をしてゐましたが、ナイチンゲールを見ると、うれしさうに尾をふりました。羊か



ひは「もしこの犬が物がいへたら、さぞ厚くお禮をいふでありませう。」といひました。

## 第二十一　博愛

ナイチンゲールが三十四歳のころ、クリミヤ戰役といふいくさがありました。戰がはげしかつた上に、惡い病氣がはやつたので、負傷兵や病兵がたくさんに出來ましたが、いしやもかんごをする人も少いために、大そうなんぎをしました。ナイチンゲールはそれを聞いて、

大ぜいの女を引きつれて、はるゞ戰地へ出かけ、かんごの事に骨折りました。ナイチンゲールはあまりひどくはたらいて病氣になつたので、人が皆國に歸ることをすゝめましたけれども、きゝ入れないで、病氣がなほると、又力をつくして傷病兵のかんごをいた

しました。戰爭がすんでイギリスへ歸つた時、ナイチンゲールは女帝に、はいえつをゆるされ、厚いおほめにあづかりました。又人々もその博愛の心の深いことにかんしんしました。

## 第二十二　國旗

この繪は紀元節に家々で日の丸の旗を立てたのを、子供たちが見て、よろこばしさうに話をしてゐる所です。

どこの國にもその國のしるしの旗がありま

す。これを國旗と申します。日の丸の旗は、我が國の國旗でございます。

我が國の祝日や祭日には、學校でも家々でも國旗を立てます。その外、我が國の船が外國の港にとまる時に

も之を立てます。

國旗はその國のしるしでございますから、我等日本人は日の丸の旗を大切にしなければなりません。又禮儀を知る國民としては外國の國旗もさうたうにうやまはなければなりません。

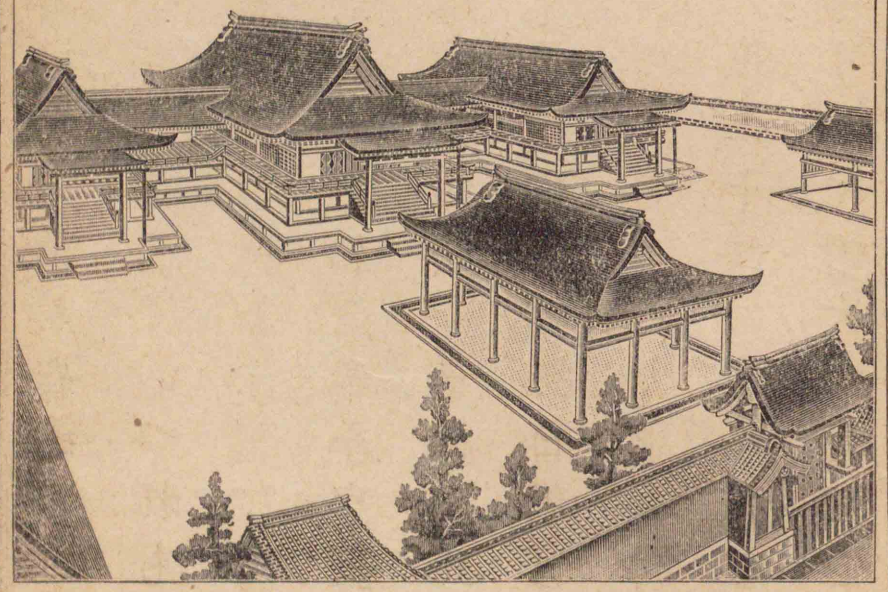
第二十三　祝日・大祭日

我が國の祝日は新年・紀元節・天長節・明治節でございます。新年は一月一日・二日・五日、紀元節

は二月十一日、天長節は四月二十九日、明治節は十一月三日で、いづれもめでたい日でございます。

大祭日は元始祭・春季皇靈祭・神武天皇祭・秋季皇靈祭・神嘗祭・新嘗祭・大正天皇祭でございます。元始祭は一月三日で、宮中の賢所・皇靈殿・神殿にてお祭があります。神武天皇祭は四月三日、大正天皇祭は十二月二十五日でございます。神嘗祭は十月十七日で、この日にはその年





の初穂を伊勢の神宮におそなへになり、新嘗祭は十一月二十三日で、この日には神嘉殿にて神神に初穂をおそなへになります。又春分の日、秋分の日に、御代々の皇靈をお

祭りになるのが春季皇靈祭秋季皇靈祭でございます。

祝日大祭日は我が國にてまことに大切な日で、宮中ではおごそかな御儀式を行はせられます。我等はよくその日のいはれをわきまへて、忠君愛國の精神を養はなければなりません。

## 第二十四　法令を重んぜよ

昔ギリシヤの大學者ソクラテスはいろ〳〵

國の爲に盡し、又若い人たちに正しい道を教へました。ところがソクラテスを憎む人人に訴へられて、とうとう死刑を言渡されました。弟子のクリトンは獄へ面會に行き、「罪もないのに死なな

ければならない道理はありません。今、獄を逃げ出す道があるから、すぐにお逃げなさい。」といつて、しきりにすゝめました。ソクラテスは「自分は今まで國のために正しい道をふんで來たから、今になつてそれをやぶることは出來ない。國法にそむいて生きてゐるよりも、國法を守つて死んだ方がよい。」といつて、おちついてゐました。



## 第二十五　公益



昔、羽後の海べの村々では、暴風が砂をふき飛ばして、家や田をうづめることが度々ありました。栗田定之丞といふ人が、或郡の役人であつた時、その害をのぞかうといろ〳〵くふうしました。先づ海べの風のふく方に、わらたばを立てつらねて砂をふせぎ、そのうしろに、やなぎや、ぐみの枝をさゝせましたら、皆めをふくやうになりました。そこでさらに松の苗木をうゑさせました。それがしだいに大きくな

つて、つひにりつぱな林になりました。

その後定之丞はほかの郡の役人になりましたが、そこでもこの事を土地の人にすゝめました。はじめははげしいはんたいを受けたけれども、いろい

ろとさとし、自分が先に立つてはたらいたので、また松林がしげるやうになりました。

定之丞は十八年の間もこの事に骨折りました。そのために風や砂のうれへがなくなつて、麥粟(あは)などの畑(はた)もところ〴〵に開け、又しようろやはつだけも生ずるやうになりました。この地方の人々は今日までもその恩をありがたく思ひ、定之丞のために栗田神社といふ社をたてて、年々のお祭をいたします。

## 第二十六　人の名譽を重んぜよ

昔京都に伊藤東涯といふ學者がありました。江戸の荻生徂徠と相對して、ともにひやうばんが高うございました。

或日、東涯の教を受けて居る人が、徂徠の書いた文を持つて來て、東涯に見せました。その場に外の弟子が二人居合はせましたが、之を見てひどくわる口をいひました。東涯はしづかに二人に向つて、「人はめいく考がちがふもの

のである。輕々しくわる口をいふものではない。ましてこの文はりつぱなもので、外の人はとてもおよばないであらう。」といつてきかせたので、弟子どもは深くはぢ入りました。

## 第二十七　よい日本人

天皇陛下は明治天皇ならびに大正天皇の御志をつがせられ、ますます我が國をさかんにあそばし、又我等臣民を御いつくしみになります。我等はつねに天皇陛下の御恩をかうむることの深いことを思ひ、忠君愛國の心をはげみ、皇室を尊び、法令を重んじ、國旗を大切にし、祝祭日のいはれをわきまへなければなりません。日本人には忠義と孝行が一ばん大切



なつとめでありません。

家にあつては父母に孝行をつくし、兄弟たがひにしたしまなければなりません。

人にまじはるには、よく禮儀を守り、他人の名譽を重んじ、公益に力をつくし、博愛の道につとめなければなりません。

そのほか規律たゞしくし、學問にべんきやうし、迷信におちいらず、又常に身體を丈夫にし、克己のならはしをつけ、よい習慣を養はなけ

れば なりません。大きくなつては志を立て、自立自營の道をはかり、忠實に事にあたり、志を堅くし、仕事にはげまなければなりません。我等は上にあげた心得を守つてよい日本人とならうとつとめなければなりません。けれども よい日本人となるには多くの心得を知つて居るだけではなく、至誠をもつてよく實行することが大切です。至誠から出たものでなければ、よい行のやうに見えてもそれは生氣のない造花のやうなものです。

をはり

昭和二年十月十八日翻刻印刷
昭和二年十一月廿二日翻刻發行

尋常小學修身書卷四兒童用
臨時定價金八錢

昭和二年十月十九日
文部省檢査濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
翻刻發行兼印刷者代表者　東京書籍株式會社　石川正作

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社

S.710-

尋四男
土井實

四

375.93
M

広島大学図書
2500027860